

街を行く

第102回 心齋橋 Shinsaibashi

ノスタルジックに浸りました

大阪で一番賑やかな商店街は、言わずと知れた「心齋橋」です。大阪にはキタとミナミと呼ばれる両繁華街がありまして、キタは梅田、ミナミは難波の界限を指します。その中で御堂筋と平行するように難波、至る商店街が心齋橋です。

小生がまだ子供の頃、繁華街の中心はデパート(百貨店と呼んだ方がしっくりときます)でした。キタの梅田は阪急と阪神、ミナミの心齋橋沿いはそごうと大丸、難波は高島屋でした(残念ながらそごうはなくなり、大丸新館に建て替えられています)。“お出かけ”する買物といえば行き先は百貨店で、子供にとっては、買物のオマケとして館内大食堂に連れて行ってもらうのが一番の楽しみでした。お目当ての定番はお子様ランチで、少し成長するとラーメンになりました。百貨店の大食堂以外では、たまに心齋橋の商店街の洋食レストランで食べさせてもらったグラタンの味とお洒落な雰囲気がいまだに忘れられません(今でこそ家庭で簡単に作れる料理も、当時の外食界ではお洒落の王様だったのです)。成長すると関心の的は、食べ物からマンシングウェアのボロシャツ、コンバースのスニーカー、VANジャケットといったファッションへ移りましたが、お洒落の先端アイテムは常に心齋橋で手に入れたものです。思い出がいささかあり過ぎるのかもしれませんが、小生にとって心齋橋は“特別な場所”なのです。今は訪日観光客にとっての特別な場所といえるでしょう。京都・奈良・心齋橋は関西周遊バックツアーの定番として賑わっており、特

に中国人観光客の多さには目を見張るものがあります。街を歩く人の話し声も、商店のアナウンスも、売り子さんの声までもが中国語です。決して大げさではなく、北京や上海にいるように、歩いている日本人の身として、なぜか肩身が狭い気持ちになってきます。

混雑ぶりは凄まじく、のんびりとウィンドウショッピングをするなんてとんでもない。前へ進むにも目の前の人混みをかき分ける必要があります。どこへ行くにも何をすることも疲労困憊してしまう有様です。地元の人に「あそこへ行くなら気合を入れなさい」と言われたことが身に染みた次第です。

観光は日本の数少ない成長産業ですし、大阪は完全にその方向へ舵を切っています。ですから小生が口を挟む筋合いではありませんが、ちょっと行き過ぎなのではないですかね? いま、世界中の観光地で観光客と地元住民の間でのトラブルが起こっているようです。観光客の購買力は地元経済に大事なものはわかります。ですが、長い目で見て地域文化の大切さも忘れないでいただきたいものです。もう少し、その街なら



グローバル化する心齋橋。おなじみ道頓堀は訪日観光客で大賑わい

ではの風情を残した発展の仕方はないものでしょうか? それは東京・銀座にも言えることです。個性を大事に発展していかないと、街そのものの良さを失ってしまいますよ。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。